

【共同研究】

戦争の記憶の伝承における子ども・若者の役割の考察

村上 純一* 宮田 浩二**

A Study on the Role of Youth and Children Concerning the Tradition of Memories of the War

Junichi MURAKAMI, Koji MIYATA

Over twenty years have passed since the start of 21st century, and several wars are occurring around the world. This highlights the importance of facing the disaster of war and striving to prevent wars.

In order to face the disaster of war, we can learn much from war museums. We can especially learn from the actual accounts of people who experienced the war. When we focus the accounts of such people, we find that many of those accounts are from children and youth. The purpose of this paper is to ascertain the role of such accounts of children and youth and the specific elements of those accounts.

Keywords : peace education, war experience, tradition, war museum, children and youth

平和教育、戦争体験、伝承、戦史資料館、子ども・若者

I はじめに

前半に二度の世界大戦を経験し、その後も東西冷戦とその中での核抑止論にも拠った軍拡競争など戦火が上がる危機と常に背中合わせでありながらも、国際協調や国家間の平等の達成に向けた試みもまたなされてきた20世紀が終わりを告げてから、間もなく四半世紀が経とうとしている。2000年代に入り、2001年9月11日のアメリカ同時多発テロとその後のアフガン戦争やイラク戦争、アフリカはリビアやスーダンなどでの内戦、シリア内戦など、必ずしも主権国家対主権国家の図式で描けるわけではないものの決して看過することはできない戦火は世界各地で上がり続けている。そして2022年2月にはロシアがウクライナに侵攻し、その後1年以上が経過した今もなお戦闘状態が続

いているなど、今なお世界中の多くの地域が平和とは程遠い状態に置かれてしまっている。

翻って日本の状況を見てみると、地理的に核の脅威と無縁といえる状況では必ずしもなく、戦争や戦闘の危機を全く感じる必要がないかと考えるとそこには議論の余地もあるものの、少なくとも本稿執筆時点である2023年10月の段階では、8月15日の「終戦の日」が指す「終戦」とは1945年の太平洋戦争終戦であり、2023年の終戦の日と前後して放送された戦争を特集する番組では、「戦後78年」という数字が語られていた。平均寿命が80歳を優に超えるようになっている今日であっても戦争体験を有している方々は少なくなっており、戦争という事象に対して日本は世界でも珍しい、比較的俯瞰して考えることが可能な環境にある地域であるといえる。

戦争の惨禍を俯瞰して考えるにあたり、有意義

* むらかみ じゅんいち 文教大学人間科学部人間科学科

** みやた こうじ 文教大学人間科学部人間科学科

な方法としては戦争に関する資料館を訪ねたり、戦争体験者の手記やそうした方々の語りを記録した書物等を読んだりする方法がひとつ挙げられる。原子爆弾が投下された広島や長崎の平和資料館は言うに及ばず、義務教育段階の社会科の教科書にも掲載されるような戦争由来の史跡は全国に数多い。戦争の記憶を記録として遺していくための場所やものが、日本には多数存在しているといえる。

そうした戦争の惨禍を後世に伝えるための施設や資料を見ていると、多くの場合、そこには子どもや若者の声があることに気付く。勿論、筆者らが日常、二十歳前後の若者と接しやすい環境にいるが故に、戦争当時その世代だった方々の声に知らず知らずのうちに強い関心が向いてしまっていることはあるのかもしれない。しかし、そうした筆者らの潜在的な興味関心に留意したとしても、やはり子どもや若者の戦争体験には子どもや若者であるからこそ訴えているものが小さくないと思われる。そのことは否定できるものではないであろう。

本稿はこうした問題関心に基つき、戦争の記憶を後世に伝えるにあたり、子どもや若者の声だからこそ伝えられるものとは何か、その実態を考察するものである。子どもや若者であるからこそ語れるものは何なのか、戦争の記憶を世代を超え時代を超えて語り継いでいくために子どもや若者が担う役目とは何なのか、そのことを試論的にはあるが考えていくことにしたい。

Ⅱ 関連書籍と研究方法

(1) 関連書籍

戦争に関して扱っている既発行書籍や既発表論文は、言うまでもないことであるが、枚挙に暇がない。どの書店においても、どの図書館においても、あるいは論文データベースにおいても、戦争をテーマとしている書籍や論文を探すだけであれば、ほとんど時間をかけることなく膨大な数のものを見つけることができる。たとえばトルストイ『戦争と平和』やクラウゼヴィッツ『戦争論』など、義務教育の中で「名著」として紹介される書籍に

も戦争をテーマとしたものは数多あるといえる。

その中で、特に本研究と関連が深いと思われる戦争の記憶の伝承に関する書籍について、ここで簡単にその特色とともに整理をしておくことにしたい。

戦争の記憶を伝承する書籍として、まず挙げることができるのは著者本人の戦争体験を綴ったものである。たとえば半藤(2010)では、1930年に生まれ十代前半が太平洋戦争の戦時中にそのまま重なった著者の、1941年12月8日の開戦から1945年3月10日の東京大空襲までの記憶が、空襲直後の東京のまちの情景の記憶にも言及されながら克明に記されている。また、時に「戦後最大のベストセラー」ともいわれる黒柳(1981)でも、最終盤では著者の通う学校が空襲によって焼け落ちてしまう様子が著者の目に映るままに描かれている場面がある。

一方、著者の直接の記憶ではなく、著者が戦争体験者の経験を聞き取り、それを基にして書かれているものも多い。島本(2006)では、戦後生まれの著者が特攻隊に配属されたが落命を免れた戦争当時十代の若者であった人々や学徒動員でフィリピンにて従軍した人々から聞き取ったエピソードなどが記されているほか、塩沢・島田(1975)にも、十代や二十代で過ごした戦時に夫や家族を亡くし、戦後を独りで生きることになった女性の物語が複数掲載されている。

2019年3月まで広島平和記念資料館の館長を務めた志賀賢治氏は、その著書の中で、資料館の意義を「収集・保存、展示、調査・研究という「博物館」の機能を発揮しながら、「もの」をして語らしめ、そして、その「もの」とともに記録された死者の記憶を伝え続け、「死者との対話」を、「死者の無念」を聞くことを、可能にする場」であることと述べている(志賀2020 p.232)。

もちろん、澤地(1986)で記録がまとめられているミッドウェー海戦のように、従軍した人々の大多数が十代や二十代の若者であり、必然的にそうした世代の声が多数残っている場合も十分にあり得ることはある。しかし、その点を考慮に入れた上でもなお、子どもや若者に特有な「死者の無念」があると考えることは決して的外れではな

いであろう¹。こうした関心に基づき、本稿では子どもや若者の戦争体験を語る声に着目し、そこに特有の要素を探ることを試みる。

(2) 研究方法

本稿では研究方法として、日本国内にある、展示を子どもや若者に特化していくつかの戦史資料館に注目し、その展示資料や刊行資料にある戦争体験の声から子ども・若者に特有の要素を探る。具体的な施設としては、沖縄県糸満市にある「ひめゆり平和祈念資料館」、沖縄県那覇市にある「対馬丸記念館」、鹿児島県南九州市にある「知覧特攻平和会館」の3館に注目して分析を試みることにする。

Ⅲ 戦争を体験した子ども・若者の声からの考察

前節までに述べた問題関心に基づき、本節では今回注目する資料館の展示や公刊資料に掲載されている子ども・若者の戦争体験の声から、その特徴を見出していくことにしたい。

(1) 沖縄県糸満市「ひめゆり平和祈念資料館」

①施設の概要

1つ目に取り上げる施設は、沖縄県糸満市のひめゆり平和祈念資料館である。同館は、太平洋戦争時の沖縄において、沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の教員・生徒で構成された「ひめゆり学徒隊」の戦争体験を伝えるために設けられた施設である。資料館の入り口付近には有名な「ひめゆりの塔」が建立されている。ここでは同館の展示やそれに基づいた同館オリジナルの資料集『ひめゆり学徒の証言』から、ひめゆり学徒隊の隊員として従軍した方々の戦争体験の語りを見ていくことにしたい。

②展示・資料から

ひめゆり平和祈念資料館の展示は、のちに「ひめゆり学徒隊」の学徒となる沖縄師範学校女子部・沖縄県立第一高等女学校の生徒たちの学校生活についての展示から始まる。そこには当時使用され

ていた教科書やノート、裁縫箱などが無傷の状態で見開きの状態で展示されているが、そこで目にできるのは数学の授業の際に取られたノートである。教科書の展示などは当時の学校教育の内容を示す意図もあると思われるものの、戦火に巻き込まれていない教具・教材の数々は、従軍前の生徒には戦場が必ずしも目前にはない日常があったことを示しているともいえる。

一方、ひめゆり学徒隊の隊員となった女性の証言の中に、次のようなものがある。これは学徒隊解散直後、1945年6月20日に摩文仁海岸で起こった出来事とされる。

手榴弾を二発持っていました。これで死ぬということになりましたね。だけど一発で一人は確実に死ぬるが、二発で九名は無理という話になったんですね。「私に手榴弾を抱かすんだったら死んでもいい。そうでなければ傷のない完全な姿でいたい」とひよりは言うんです。そしたらひよりが「早まっちはいけないよ」と言いました。そしたら、「今までの教育を忘れたか」「どんな教育をあんた受けたの」「こうして生き恥をさらすのか」と同級生同士真剣に言い合うんです。凄かったですね。下級生は一言も言いません。先輩がやるようにしかできないと思っているんでしょうね。黙って聞いているんです。側で下士官らしい兵が私たちのやりとりを聞いていたんです。「学生さん、滅私奉公の時代は過ぎたんだよ。あなたなんか死んだら、この沖縄はどうなるか」(天久節「今までの教育を忘れたか」『ひめゆり学徒の証言』s-60頁)

終戦直後にはそれまで使用されていた教科書の「墨塗り」が行われるなど、戦前の軍国主義教育が全否定されたのはよく知られているところである。この証言記録からは、終戦を前にそれまでの軍国主義教育を否定する機運が起り始めていたこととともに、軍国主義教育を最も強く受け、その否定との葛藤に最前線に向き合うことになった

という当時の若者の置かれた立場を窺うこともできる。

ひめゆり平和祈念資料館の展示からは、このような若者ならではの注目すべき点を見出すことができる。

(2) 沖縄県那覇市「対馬丸記念館」

①施設の概要

次に、沖縄県那覇市に所在する「対馬丸記念館」を取り上げる。同館は2004年8月22日に、対馬丸事件ⁱⁱの犠牲者の鎮魂とこの事件を後世に語り継ぐことを主な目的として開館した施設である。この対馬丸記念館の館内展示および同館の公式ガイドブックの記述をもとに考察していくこととする。

②展示・資料から

対馬丸記念館の展示は子どもに関するものが大部分を占め、その展示方法も、子どもに伝わることが考慮されている。これはもちろん、対馬丸事件で犠牲となった方々の大多数が子どもであり、沈没した対馬丸の船体が発見された当時の新聞記事などでは対馬丸が「学童疎開船」として記載されているⁱⁱⁱことも踏まえれば、犠牲となった子どもに関する事項を中心に、子どもにも事件が伝わることが意図した展示となっていることは自然なことであるという見方も可能であるといえる。しかし、そうして子ども中心の展示となっていることで、子どもに注目することの特徴として浮かび上がってくることは少なくないということもまたいえるところであろう。

次に、『対馬丸記念館公式ガイドブック』の具体的な記述から、注目すべき内容を取り上げる。それは、生存者が回想する、乗船した子どもたちの対馬丸出航時の心情、および船中での様子についての以下の記述である。

- ・「修学旅行にでかけるようなもんね」
- ・「雪も富士山も見ることができる」
- ・「お母さん、もし船が沈んだらどうしよう」
- ・「薄暗い星空の下で、友だち同士が甲板のあちらこちらで楽しく話合っていました」

1つ目の「修学旅行」という言葉や、2つ目、4つ目の記述からは、対馬丸での学童疎開に対して大勢の友達とともに遠くへ出かけるような感覚を抱いていた子どもたちがいたことを窺い知ることができる。また、3つ目の「もし船が沈んだら…」という心配事を子どもが抱くのは、何も戦時に限ったことではないと考えられる。こうした点から、たとえ戦時中であっても子どもは戦時に限らない、今日でもその様子が見られるような心情を抱くこともあることが窺える。戦時であるからこそその感情と、必ずしも戦時に限られない感情とを区別して戦争体験を捉えることの重要性をこうした点は示しているといえよう。

(3) 鹿児島県南九州市「知覧特攻平和会館」

①施設の概要

知覧特攻平和会館は、太平洋戦争末期に行われた「特攻」、すなわち航空機に乗り敵艦に航空機もろとも体当たりするという作戦によって命を落とした方々の遺品や関係資料を展示している施設である。特攻隊員は多くが十代や二十代の若者であり、その平均年齢は21.6歳であったことから、必然的に若者の遺品や声と同館やその関係資料には集められていることとなる。その展示資料や同館で発行している書籍から、戦争によって命を落とした若者の声に込められているその「無念」を考えていくことにしたい。

②展示・資料からの考察

知覧特攻平和会館では、海中から引き揚げられた海軍零式艦上戦闘機の機体の展示や、特攻隊員が出撃前の時間を過ごした三角兵舎(次頁の写真)の復元がなされており、館内の遺品等の展示と相俟って、特攻に向かわんとする若者の様子が偲ばれる施設となっている。

同館では、特攻隊員たちの「最後の言葉」を集めた書籍を刊行している。この知覧特攻平和会館編(2011)から、とりわけ注目すべき「特攻隊員の最後の言葉」を以下に取り上げる(氏名・年齢は引用した言葉を遺した特攻隊員の氏名・年齢、頁数は同書における引用部分の掲載頁を示す)。



写真1



写真2

(写真は2枚とも現地訪問時に村上撮影)

○「・・・今こうして出撃命令を受取って見ますと何だか一人前の男になった様な満足感が全身を走ります。…(中略)…輝夫は本当は三十五歳以上は必ず生きるそうですが、しかし大君の命によって国家の安泰の礎として征きます。」(宇佐美輝夫 18歳/pp.8-9)

○「幸一君 一歩先に征く 御両親の事はよろしく頼むぞ …(中略)…俺の嫁は空母ときめた お前には三国一の花嫁を迎えてやりたいな 元気で皆様と楽しく暮らしてくれよ ではなくれぐれも後を頼むぞ」(矢作一郎 23歳/p.15)

○「・・・入営と同時に皇国のため捨てる命と定めておりましたがやっと年来の希望かない特攻の大命を押し喜んで死んで行きます。」(若杉潤二郎 24歳/p.35)

○「今はもう総ての俗念も去ってすがすがしい気持ちです。数時間後には此の世を去るとは思へない程、抱へる爆弾はどす黒く光って居ます。しっかり爆発するぞと云はぬばかりに。では行って来ます。皆様 お元気で 四月二十八日十五時 さよなら」(溝川慶三 21歳/p.39)

○「お父様いよいよお別れの時が来ました。少しなりとお役に立って死ぬる事を豊志は最大の幸福と思い喜んで死んで行きます。…(中略)…今に弟の二人共豊志の後に続き共に國のため死んでくれる事を最大の願として行きます。お母様お体大切に。」(高田豊志19歳/pp.50-51)

これら「最後の言葉」からは、特攻隊に配属されなければ -それはひいては戦争が起らなければ- まだまだ生きられて当然であった命が突然絶たれざるを得なかったこと、二十歳前後の若者が己の生きる将来への希望を語ることが許されなくなってしまうことが分かる。

もちろん、戦争がなければもっと続いた命が戦争によって絶たれてしまうのは、若者特有のことでは全くない。しかし、特に子どもや若者であれば、自らが生きている前提で将来の希望を語れる

ことは当たり前のことと言っても強ち間違いではない。この「当たり前」が「当たり前」ではなくなるのが戦争である。戦争に関わって上げられる若者や子どもの声は、その事実を際立たせるものであることがいえる。

IV 総合考察と課題

(1) 総合考察

以上、本稿では太平洋戦争に由来する3つの戦史資料館の展示や資料から、子どもや若者の戦争体験を語る声が戦争を伝承していくにあたって特に担っている役割について考察してきた。最後に、改めてここまで考察してきたことをまとめておきたい。

まず、国民が総動員された印象が強く、「一億総玉砕」が叫ばれたこともよく知られている太平洋戦争であるが、戦時中の子どもや若者の日常を具にみると、必ずしも戦時中常に戦火と背中合わせの暮らしを強いられたわけではなく、戦地とは多少距離のある「学び舎での日常」も存在していたことに気付かされる。と同時に、そこで軍国主義教育が行われていたことに鑑みれば、戦時中の軍国主義教育にも、そして終戦直後のそうした教育の否定にも最前線向き合うことになったのが子どもや若者であり、そうした葛藤に最も強く向き合った世代であったことを窺い知ることができる。

また、子どもや若者の戦時中のできごとを語る声であっても、必ずしもその全てが戦時中ならではのものではない場合もあることも注目されることである。戦時中に人々が抱く感情の全てが平時と異なる戦時特有のものであるとは限らないことを示唆している点も、子どもや若者の戦争体験を語る声からは推察することのできるものである。

そして何より、子どもや若者にとって、自分自身が生存していることを半ば前提として将来の希望を語ることは、人間の寿命を考えれば全然不思議なことではないことになる。しかし、戦争はこの「当たり前」を「当たり前」として通用させなくするできごとであるといえる。

こうした点に関わって、ひめゆり平和祈念資料館のオリジナル資料集『ひめゆり学徒の証言』には、資料館初代館長である仲宗根政善氏の次のような言葉が掲載されている。

平和祈念資料館は、ありし日の学舎を模したものです。私たちは、そういう学舎で、希望に胸をふくらませ、さまざまな夢を語りあったのです。その夢が、戦争によって、無惨に打ち砕かれてしまったわけです。（『ひめゆり学徒の証言』p.94）

また、対馬丸記念館の『公式ガイドブック』巻頭頁には以下のような記述がある。

暗くつらい戦時でも「夢」は持っていました
でも、生きていればこそその「夢」
犠牲になった彼らの無くしてしまった「夢」
彼らが持っていたであろう未来への「夢」
その「夢の未来」に私たちは生きています
（中略）
いまも世界では報復の連鎖が子どもたちから
新たな夢と希望を奪っています
この報復の連鎖を断ち切る努力を一人ひとりが
がすること
これこそが、対馬丸の子どもたちから指し示
された私たちへの「課題」ではないでしょ
うか

こうした、その先も続くはずであった生命が突然絶たれ、そして語れて当然であった将来のことを語る事が許されなくなるという戦争の不条理を、まだ生命が続くことをとりわけ前提としやすい子どもや若者の声は特に際立たせるといえる。この点が、戦争の記憶を伝承していくにあたって子どもや若者の戦争体験を語る声が担っている特に大きな役割であるといえよう。

(2) 今後への課題

本稿では、太平洋戦争に由来する3つの資料館に着目して考察を行ってきた。本稿で見出された見解が国内にある他の戦争や戦乱を伝承する施設

の展示等においても当てはまることなのかは、今後さらに調査の必要な事項といえる。取り上げた資料館における展示の意図を、施設の運営者の方々から伺うことも有意義であろう。また、諸外国の戦史資料館でも同様のことが見出せるのかも、今後検証の求められる事項といえよう。

21世紀を迎えて四半世紀が経過しようとする今日においても、世界のそこかしこで戦火の上がる日々が続いている。こうした戦争の惨禍と向き合い、世界の平和を希求していく上で、「戦後」が80年近く続いている、すなわち80年近くにわたって国内が直接の戦火に曝されることを避けられている日本が果たせる役割は決して小さくないであろう。そのことも頭の片隅に置きつつ、本項で挙げた事項は今後の課題として、さらに探究を続けていきたい。

注

- i 子どもや若者への特化ではないが、対象を限定して戦争体験の聞き取りを行い、それを集めた書籍の例としてアレクシェーヴィチ（2016）が挙げられる。同書では第二次世界大戦でソ連軍に従軍した女性に限って聞き取りを行い、彼女らが戦時中は男性と同様に兵士として戦闘に参加することもあった一方で、戦後はそうした戦闘行為への参加が世間から白眼視され、その戦争体験を隠さざるを得なかったことを明らかにしている。
- ii 対馬丸事件とは1944年8月22日に発生した、沖縄から本土へと疎開する大勢の人々を乗せた貨物船「対馬丸」が米軍潜水艦ポーフィン号の攻撃を受けて沈没し、乗船していた1661名のうち1500名近くが犠牲となった事件のことである。乗船者の多くは那覇市の計8つの国民学校に通う子どもたちであった。
- iii 1997年12月12日、深海探査機を使った探査により、沈没した対馬丸の船体が鹿児島県悪石島の北西約10kmの海底で発見された。たとえば翌12月13日の琉球新報の紙面には、「学童疎開船「対馬丸」という記載がみられる。

〈参考文献〉

- スヴェトラナ・アレクシェーヴィチ (2016)『戦争は女の顔をしていない』三浦みどり訳、岩波現代文庫
- 黒柳徹子 (1981)『窓ぎわのトットちゃん』講談社
- 澤地久枝 (1986)『記録 ミッドウェー海戦』文藝春秋
- 塩沢美代子・島田とみ子 (1975)『ひとり暮らしの戦後史－戦中世代の婦人たち』岩波新書
- 志賀賢治 (2020)『広島平和記念資料館は問いかける』岩波新書
- 島本慈子 (2006)『戦争で死ぬ、ということ』岩波新書
- 知覧特攻平和会館編 (2011)『[新装版] いつまでも、いつまでもお元気で－特攻隊員たちが遺した最後の言葉』草思社
- 半藤一利 (2010)『15歳の東京大空襲』ちくまプリマ－新書

【付記】

本稿は2021年度文教大学人間科学部共同研究「現代日本における‘Disaster Education’の確立に向けた萌芽的研究(3)－戦災・被災の記憶を伝える子ども・若者の役割の考察」および2022年度文教大学人間科学部共同研究「現代日本の‘Disaster Education’における『教科書に載らない歴史』の探究」(ともに研究代表者：村上、共同研究者：宮田)による研究成果の一部です。

[抄録]

21世紀を迎えてから20年以上が経過し、世界各地で戦火の上がる事態が頻発しているなか、戦争の惨禍に向き合い、戦争を防ぐために努力することがこれまで以上に求められているといえる。

戦争の惨禍と向き合うにあたり、各地の戦史資料館から学べることが沢山ある。特に、実際に戦争を体験した方々のリアルな声に学べることは数多い。そうした戦争体験の声に注目してみると、そこには子どもや若者の声が目立つことに気付かされる。こうした戦争を語る子どもや若者の声が担っている役割、子どもや若者の声に特有の要素とは何なのか。本稿はそのことを明らかにすることを目的とするものである。
